# ジョホル首長の即位儀礼

## ——マレー半島，ヌグリ・スンビランにおける伝統的権威の存立基盤をめぐって——

富　沢　寿　勇

1.　序論
1—1.　〈ヌグリ・スンビラン〉の構成
1—2.　ジョホル首長と王
2.　ビドゥアンダ・ワリスと〈12スク〉の理念
2—1.　首長を出すビドゥアンダ・ワリス
2—2.　ジョホルの〈12スク〉
2—3.　首長継承法の変化
2—4.　ビドゥアンダ系スクとミナンカバウ系スク
3.　即位儀礼の可変性
3—1.　Dato' Kamat のクルジャン儀礼
3—2.　Dato' Haji Abdul Manap のクルジャン儀礼
3—3.　Dato' Haji Abdul Majid のクルジャン儀礼
3—4.　考察
4.　首長の現在
(註)
引用・参照文献

## 1.　序　　論

マレー半島西南部に位置するヌグリ・スンビラン (Negeri Sembilan)〔かつ

ては *Negri* Sembilan の綴りが一般的：以下，N. スンビランと略記〕は，今日ではマレーシア連邦全13州（半島部は11州）の1州を構成するが，本来は18世紀後半に成立し，現在まで存続している〈王国〉の名称である。*Yang Dipertuan Besar*（または *Yamtuan*）と称される〈王〉は，半島部マレーシアの Perak, Selangor, Pahang, Johore, Perlis, Kedah, Trengganu, Kelantan の諸州（*negeri*）に君臨する Sultan あるいは *Raja* に対応し，各州において，マレー人の宗教であるイスラームと慣習法（*adat*）の領域の長として，最高の権威を与えられている。然るに，N. スンビランの特異性は，他地域と異なり，〈王位〉は父系継承されるのに対し，これを支える基層社会は基本的に母系制をとり，母系継承される氏族長（*lembaga*）や，これらの氏族長たちを地域ごとに統轄する地方首長によって，伝統的政治・社会機構が維持されてきたことにある[1]。本稿では，これらの首長たちのうち，特にジョホル地区（*Luak Johol*）の首長（*Undang*）を取り上げ，その権威の基盤を歴史的及び構造的に考察し，以て筆者の王権研究の一環と為すことを目的としている。

### 1—1. 〈ヌグリ・スンビラン〉の構成

ヌグリ・スンビランとは，字義通りには〈9つのヌグリ（「国」）〉を意味し，*Dato'*（*Penghulu/Undang*）と称する地方首長達によって統治される地域的単位（*luak* または *negeri*）の集合体であったと考えられる。しかしながら〈9つのヌグリ〉が歴史上，現実に存在したのか，あるいは，単に象徴的な名称として意味をもったにすぎないのかは，今日まで確定されていない[2]。少なくとも，N. スンビランの構成地域の組み合せが歴史的経緯を経て変化しており，時間軸のいずれにおいて N. スンビランを語るのかは常に銘記して然るべきである。

いずれにせよ，今日の N. スンビランは9つから構成されているわけではなく，基本的には，近代行政機構上の区分とは別個に，図1のように，伝統的な慣習法上の地区が併存している。この場合においてすら，地区の数の計算法に

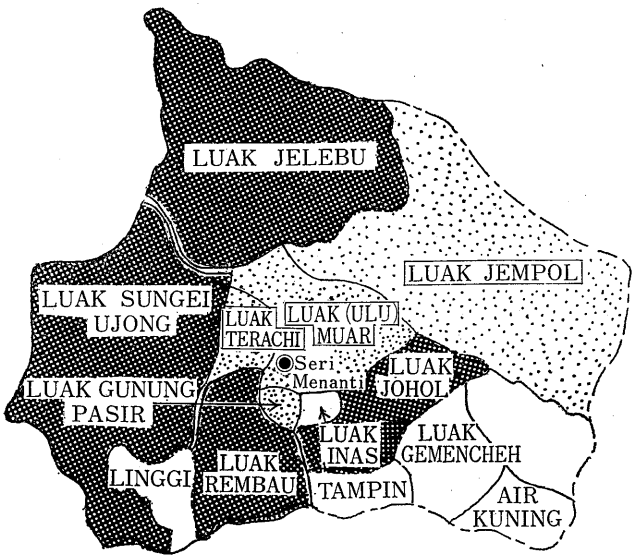


**図 1　ヌグリ・スンビランの地域構成**

一致した見解はみられないのである。たとえば首長たちの儀礼的役割に着目した P. E. DE JOSSELIN DE JONG によれば，このうちでも，とりわけ王宮所在地スリ・ムナンティ (Seri Menanti) とそれを囲繞する（ウル）ムアル ([Ulu] Muar)，テラチ (Terachi)，ジュンポル (Jempol)，グノン・パシル (Gunung Pasir)，及びこれらを更に外円的に囲繞するスンゲイ・ウジョン (Sungei Ujong)，ジュルブ (Jelebu)，ルンバウ (Rembau)，ジョホル (Johol) の 9 地域は，N. スンビランの政治組織の理念型として重要な意味を持つと指摘している[3]。一方，HOOKER は，現王 Tuanku Ja'afar の即位儀礼 (1968 年 4 月) に参列した地方首長の数に依拠し，N. スンビランは 12 の慣習法地区（ムアル，ジュンポル，テラチ，グノン・パシル，スンゲイ・ウジョン，ジュルブ，ジョホル，ルンバウ，イナス，リンギ，グムンチェー，アイル・クニン）から構成

されるとし，同時に母系制アダット（慣習法）に従わないスリ・ムナンティと，タンピン（Tampin）を含めれば，計14となるとも主張している。しかしながら彼の計算法が依拠している1968年の即位儀礼の際，宮廷側がパンフレットに示した見解では，N. スンビランの「慣習法地区」（*kawasan adat*）は，以下の6つに分けられるという。

1)　スリ・ムナンティ地域（*kawasan*）——元来，王の配下にある地域（*asalnya di-bawah Yam Tuan Sri Menanti*）で（ウル）・ムアル，ジュンポル，テラチ，グノン・パシルとイナス（Inas）を含む。

2)　スンゲイ・ウジョン地域（*kawasan/luak*）——スンゲイ・ウジョン首長（*Undang*）の配下にある。

3)　ジュルブ地域——ジュルブ首長の配下。

4)　ルンバウ地域——ルンバウ首長の配下。

5)　ジョホル地域——ジョホル首長の配下。

6)　タンピン地域（*kawasan*）——タンピンのトゥンク・ブサール（*Tengku Besar Tampin*）の配下[4]。

この6地域のうち(2)から(5)までの4地域のみ，*kawasan adat* の代替語として *luak* が並記されている。これら4地域の首長たちは〈四首長〉（*Undang Yang Empat*）として，王族父系リニージの男子成員の中から然るべき者を合議によって王として選出する権限を有し，また不適当と思われる王を罷免する資格を与えられている[5]。この〈四首長〉の支配する地域をそれぞれ独立した地域として数えるのは，研究者の一致した見解である。

### 1—2.　ジョホル首長と王

この〈四首長〉による王の選出制度は，今日のN. スンビラン州憲法に明文化されているが，これは王権の起源をめぐる歴史伝承によって正統化されている。この歴史伝承（あるいは王権起源神話）については既に別稿で論じたこと

があるので[6]，詳細は省略するが，要するにミナンカバウ系の N. スンビラン住民が自分たちの王を持ちたいと考え，故地スマトラのミナンカバウ王家から初代王ラジャ・ムレワル（Raja Melewar）を迎え，この王が〈四首長〉によって，即位を正統化されたという伝承に由来するのである。これは一般に西暦1773年の〈出来事〉とされるが，その当時の〈四首長〉を構成する地域名は，歴史伝承の様々なヴァージョンによって，必ずしも今日のそれと一致するわけではない[7]。しかし，いずれのヴァージョンにおいても，ジョホル首長は〈四首長〉の一人として言及されている点で一致が見られる[8]。

王権起源伝承では，初代王ラジャ・ムレワルはムアル（ウル・ムアル）の首長（*Penghulu*）を殺し，そこに王宮所在地スリ・ムナンティが成立するのだが，このムアル首長の起源伝承自体も，王権起源伝承と相似の構造をもつ。即ち，ムアルの住民が自分達の首長を持ちたい旨を「イナス」（'Inas'）または「ジョホル」（'Johol'）の首長に訴え，その結果遣わされた女首長の息子が，初代ムアル首長となったというのである[9]。この伝承で「イナス」と「ジョホル」が互換的に，あるいは混同されて言及されているのは，現在のジョホルとイナスの領域が，18世紀までジュライ（Jelai）という国の一部を構成していたらしい事実[10]に由来すると思われる。ABDUL SAMAD IDRIS によれば，かつてのジョホルは，スリ・ムナンティ，ウル・ムアル，ジュンポルを含む領域に広がるものであったともいう[11]。現在の王宮所在地スリ・ムナンティを包摂する（ウル）・ムアル地域が，かつてはジョホルの一部もしくは属領として存在していたとすれば，ジョホルが N. スンビランの各地域の中で，歴史的にも，とりわけ王権と重要な関わりをもっていたことが明らかである。

## 2.　ビドゥアンダ・ワリスと〈12スク〉の理念

### 2—1.　首長を出すビドゥアンダ・ワリス

N. スンビランの地方首長は，一般的にビドゥアンダ（*Biduanda*），ワリス（*Waris/Warith*），ビドゥアンダ・ワリスまたはワリス・ビドゥアンダと称する母系氏族（*suku*）の成員に限定される特徴をもつ[12]。このビドゥアンダ（ワリス）は少なくとも N. スンビランの住民の一つの認識のあり方としては，ミナンカバウ到来以前の先住民に起源するという一般的説明がある。これをそのまま史実とみなすか否かは，研究者の見解の分かれる所である。たとえば P. E. DE JOSSELIN DE JONG は，次のような否定的見解を示している。

ミナンカバウがマレー半島に渡って来たとき，彼等はこの地が全く異質な集団によって住まれているのを知った。即ち，ネグリト系のセマン（Negrito Semang）とヴェッドイド系のセノイ（Veddoid Senoi）（しばしばサカイ Sakai とも呼ばれる）である。N. スンビランの伝承によると，ミナンカバウからの移民たちはサカイの女性と結婚し，この婚姻から生まれた子どもが，その母親から土地所有権を相続したという。この伝承は，サカイが母系組織をもつことに関して，ミナンカバウと同調したことを前提としている。このようにして，各地域（*negeri* あるいは *luha'*）は N. スンビランを形成したわけであるが，先住民女性の血を引くと想定され，それ故，全国土を本来は所有していたとみなされ，地方首長である *Undang* が常に所属しているはずの一つの氏族が各地域に存在するに至るのである。このような特権を付与された氏族は，ビドゥアンダまたはワリス氏族と呼ばれる。この伝承は，移民たちの土地所有を正統化する傾向性をもつ，疑いもないフィクションである。他地域においても，移民男性が先住民女性と結婚するテーマというのは，歴

史伝承において，真に頻繁に遭遇されるからである[13]。

このビドゥアンダ（ワリス）の土着性が DE JOSSELIN DE JONG のいうように全くのフィクションかどうかという問題は決定的な解答を与えることは出来ない。しかしながら，後述するように，ジョホル地域に限定すれば，その土着性，あるいは少なくともその非ミナンカバウ的性格がある程度，明らかになる。

本章における以下の記述は，筆者が 1982 年 2 月から 3 月にかけて，ジョホル地域で集中的に行なった調査と，その後，1983 年 3 月まで数度にわたって断続的に行なった補完的調査に基本的に依拠するものである[14]。以下，「現在」

**表 1　Johol の〈12 スク〉**（*Suku Duabelas*）

| | 氏族（*suku*）名 | 氏族長（*lembaga*） |
|---|---|---|
| I） *Lembaga*（+），*Wapak*（+） | | |
| 1) | (Biduanda) Gempa | Dato' Gempa |
| 2) | (Biduanda) Menteri | Dato' Menteri |
| 3) | (Biduanda) Raja Balang | Dato' Raja Balang |
| 4) | (Biduanda) Jenang | Dato' Jenang |
| 5) | Tiga Batu | Dato' Baginda Raja |
| 6) | Sri Melenggang | Dato' Andika |
| 7) | Mungkal | Dato' Raja Senara |
| II） *Lembaga*（−），*Wapak*（+） | | 亜氏族長（*wapak*） |
| 8) | (Biduanda) Bawa Petai | Dato' Bawa Petai |
| 9) | (Biduanda) Serumpun | Dato' Serumpun |
| 10) | (Biduanda) Baginda Melana | Dato' Baginda Melana |
| 11) | (Biduanda) Paduka Bangsa (Kebangsa) | Dato' Paduka Bangsa (Kebangsa) |
| 12) | (Biduanda) Negarang | Dato' Negarang |
| 13) | (Biduanda) Sribugarang | Dato' Sribugarang |

III）

Suku Warith (Waris)

Warith yang boleh menjadi Undang

(perut)　Johol　Gemencheh

と記す場合，この調査期間を前提としていることを断わっておく。

ジョホルにおいても，首長を出す母系氏族はビドゥアンダ・ワリス (*Biduanda Waris* または *Warith*) あるいはスク・ワリス (*Suku Warith*) と呼ばれる。〔以下，首長を出すこの氏族を単にワリスと略記する〕。ジョホルのワリスは現在，2つのプルット (*perut*：リニージ) から構成される。即ち，プルット・ジョホル (*Perut Johol*) とプルット・グムンチェー (*Perut Gemencheh*) である〔表1の (Ⅲ) 参照〕。首長 (*Undang*) が死ねば，副首長 (称号はダトッ・バギンダ・タン・マス：*Dato' Baginda Tan Mas*) が自動的に首長の資格を得る。首長は '*pesaka bergilir*' というローテーションの原則によって，2つのプルットから交替で出る。従って，副首長の選出に際しては，まず首長のプルットが対象から外される。更に，副首長の有資格者は，次の3条件を満たしていることが要求される。

(i) ジョホル地域に居住する者

(ii) ジョホルの〈12スク〉(*Suku*〔*Yang*〕*Duabelas*) の成員と結婚している者

(iii) 年金 (*pension/political allowance*) を受給している女性を出自にもつこと[15]

第2の条件にいうところのジョホルの〈12スク〉については次節で述べる。第3の条件は，イブ・ワリス (*Ibu Waris*) の母系成員であることと同義的と考えてよい。イブ・ワリスとはワリス成員の女性の中で，N. スンビラン州政府から年金の給付を受け，自己の所有する慣習法上の土地には無税という特典が与えられている者で，プルット・ジョホルに5名，プルット・グムンチェーに4名存在する[16]。イブ・ワリスは，母から娘 (一般に長女) に継承されるもので，この母系子孫 (アナッ・ワリス：*anak Waris*) 男子が，首長 (副首長) の資格をもつ。たとえば，現首長 Dato' Haji Abdul Majid 氏の妹の娘 (Ramlah) が現在のプルット・ジョホルのイブ・ワリスの1人である〔図2，図3を参照〕。

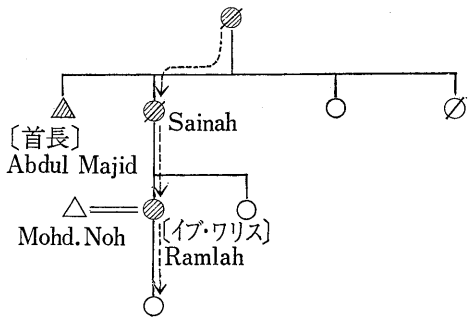


**図 2　首長 Abdul Majid のイブ・ワリス**

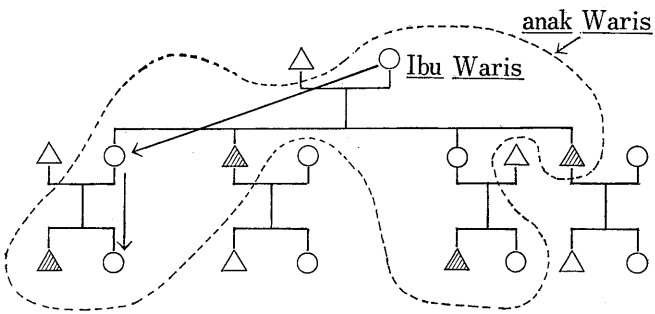


**図 3　イブ・ワリスとアナッ・ワリス**

2—2.　ジョホルの〈12 スク〉

次に副首長（首長）を選出する人々は誰かという問題があるが，これは，ジョホルの〈12 スク〉はいかなる構成をとるかという問題と絡んでくる。即ち，ジョホルにはワリスとは別に，12 のスク（母系氏族）が存在することが，現首長と氏族長 (*lembaga*) たちとの間の合議で確認されている[17]。ところがこの〈12 スク〉を具体的に列挙してもらう段になると，どうしても表 1〔(I),

(II)〕に記したように，13のスクが登場するのである。また，この13のスクのうちの6つ〔表1の(8)〜(13)〕は固有の氏族長 (*lembaga*) が欠如するのに，スクとして認定されている〔但し，*wapak/buapak*：亜氏族長は持つ〕という矛盾がある。この2点に関する筆者の疑問については，現首長自身によって，次のように説明された。

まず（ビドゥアンダ）バワ・プタイ，スルンプン，バギンダ・ムラナ，パドゥカ・バンサ（＝クバンサ），ヌガラン，スリブガランの6つのスク〔(8)〜(13)〕の長（＝亜氏族長）は〈6人のワパッ〉(*Wapak Yang Enam/Buapak Yang Enam*) を構成する。この6つのうち，スリブガラン〔(13)〕のみは（ビドゥアンダ）ジュナン〔(4)〕の氏族長を，同時に自らの氏族長とする[18]。他の5つ〔(8)〜(12)〕は副首長（ダトッ・バギンダ・タン・マス）を自らの氏族長とする。従って，ジョホルの〈12スク〉は表1のスリブガランを除くスクから成るというのである。スリブガランは〈12スク〉に入らないという説明で第1の疑問は解決するのだが，それでも他の5つが依然独立的にスクとして数えられる根拠が判然としない。これは，次のような婚姻規制を考慮すると，イデオロギー的な背景がどうも強いようにも思われる。

即ち〈6人のワパッ〉を構成する6つのスクのうち，スルンプン〔(9)〕のみはワリスと通婚可能であるが，他の5スク〔(8)(10)(11)(12)(13)〕はワリスとの通婚が許されない。一方，これら6つのスク〔(8)〜(13)〕の間での相互の通婚は認められている。この点で WINSTEDT が，ジョホルのビドゥアンダについて「ミナンカバウ的な外婚規制が支配していない」と指摘し，あるいは P. E. DE JOSSELIN DE JONG がその内婚傾向とカースト的性格を主張しているのは[19]，おそらく上記のビドゥアンダ系の6つのスク間の婚姻に言及しているためと思われ，ワリスとの通婚不可の側面を考慮していないことになる。

それでは，6つのビドゥアンダ系のスクが相互に通婚可能であることと，ワリスとの通婚はスルンプンを例外として禁止されている意味は何であろうか。

これには，6つの長である〈6人のワパッ〉の，副首長（首長）選出に際しての関与のあり方と，彼等がワリス成員に対して行なう儀礼的機能の2点が着目される。

まず副首長（首長）の選出は，NATHAN & WINSTEDT によれば，1912年の段階で，ワリス・ビドゥアンダの長であるダトッ〔トッ〕・ジュナンとビドゥアンダ族の〈6人のワパッ（ブアパッ）〉の全員一致で決められたとしているし，また，HOOKER は，トッ・ジュナンとワリス・ビドゥアンダの〈6人のブアパ〉の全員一致で決定されるとしている[20]。ダトッ・ジュナンはかつてはワリスの長（*kepala*）といわれたが[21]，今日ではワリスとは別個の独立したスク（ビドゥアンダ・ジュナン〔表1の(4)〕）の氏族長にとどまっている。これに呼応して現首長は，上記のような選出規定は既に廃止されたとし，更に次のように説明を加える。

「副首長は，彼の母系氏族成員（*anak buah*），即ちワリス成員（*anak Waris*）によって選出される。選出されると，これが〈6人のワパッ〉及びダトッ・ジュナンと〈4人の氏族長〉(*Lembaga Tiang Balai*)[22] に報告される。首長が死ねば副首長が首長となり，氏族長たちの前で，ダトッ・ジュナンがそれを公式発表する。なお副首長の選出に際し，その成員間で意見の一致が3ケ月 10 日の期間内に見られないときには〔その時の〕首長に決定権が移行する。」[23]

このように副首長（首長）の選出に際し，実質的発言権を持っていたと考えられるダトッ・ジュナンと〈6人のワパッ〉から，選出権の主体がワリスの成員に移った事実を考慮すると，今日，ダトッ・ジュナンを氏族長とするビドゥアンダ・ジュナン〔表1の(4)〕のみならず〈6人のワパッ〉に率いられるビドゥアンダ系の6スクのうち少なくともスルンプンを除く5スク〔表1の(8)，(10)～(13)〕は，いずれも，かつてはワリスの一部を為していたものが，何らかの政治的配慮で切り離されたものと考えられる。

興味深いのは〈6人のワパッ〉がワリス成員に対し，今日でも同一氏族成員が果たす儀礼的役割を維持していることである。つまり婚姻などの儀礼に際し，当該氏族の年長男性が氏族を代表して，ワパッ (*wapak*) またはブアパッ (*bua-pak*) として，儀礼の遂行に不可欠の役割を果たすが，ワリス成員の場合，このワパッ役を〈6人のワパッ〉に依頼することができるのである[24]。これもまた，彼等の6スクが，ワリスと同根であったことと関連しているのではなかろうか。

スルンプンのみがワリスと通婚可能という点は問題として残されるが，現段階では，比較的近年，即ち，他の5スクがワリスから切り離された後に，外部から新たに追加されたスクである可能性を仮説的に提示しておく[25]。いずれにせよ，少なくとも他の5スクは本来ワリスの一部であったものが，その中核部分から各々の末端で切り離された結果生じた集団と考えられるのである。そして，これらの5集団は，母系氏族集団（スク）を基本単位とする社会環境の中で，同様に擬似スクとして結晶化して行ったのであろう。相互に通婚可能という事実は，その結果として生じた現象であって，「ビドゥアンダの内婚傾向」を語るものではない。それはむしろ，上記5集団がかつて同根であったと考えられるワリスとの通婚禁止という規範の存在によって，逆に否定されるべき性質のものであろう。

### 2—3.　首長継承法の変化

以上のように首長を独占的に出すワリスに，比較的最近分裂が生じた，あるいは，より正確には，ワリスの一部が中核部分から排除された背景には，首長継承法自体の改変が横たわっているように思われる。というのも，ビドゥアンダ・バワ・プタイ〔表1の(8)〕のある女性が，「かつては我々のスクもワリスであった」と不満を洩らした際，彼女の夫のビドゥアンダ・クバンサ〔同(11)〕成員は，それにコメントを加え，第8代首長 Dato' Wan Omar の時代にワリ

スの構成に手が加えられたらしいと筆者にほのめかしたことがあるからである。これは極めて示唆に富む発言である。何故なら，この Wan Omar の時代に，ジョホル首長の継承法に一大変化が起きたからである。

歴代のジョホル首長の系譜を見ることにしよう〔表2参照〕[26]。興味深いのは，初代 Siti Awan，2代目 Rambut Panjang，3代目 Siti Awan Dua の最初の3人は女性であって，4代目以降から男性首長になったと伝えられていることである[27]。さて，今日のワリスは先述のようにプルット・ジョホルとプルット・グムンチェーから成立しているが，実はこの2つのプルットで交替で首長を出すという *giliran* の制度は決して古いものではなく，第8代目首長 Wan Omar（在位 1901-1918）の時に由来するのである。また副首長の称号がダトッ・バギンダ・タン・マス（*Dato' Baginda Tan Mas*）となったのもこの時以来で，それ以前はダトッ・ムダ（*Dato' Muda*）が次期首長のための称号であった。ところが，第7代目の Dato' Eto の時，ダトッ・ムダの保持者 Pileh がその横暴で野蛮な性格のため首長としての人望が得られぬことになって，そのままダトッ・ムダの称号は廃止された。そして当時のワリス（現在のプルット・ジョホル）に属さなかったが，既に近代的学校教育を受け，事務能力にもたけていたダトッ・バギンダ・タン・マスの称号を持つグムンチェー出身の

**表 2　Johol 首長の系譜**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1) | Dato' Siti Awan | 1722–1747 | (女) | |
| 2) | Dato' Rambut Panjang | 1747–1760 | (女) | |
| 3) | Dato' Siti Awan Dua | 1760–1790 | (女) | |
| 4) | Dato' Rambutan Jantan | 1790–1810 | (男) | |
| 5) | Dato' Nuri | 1810–1820 | (男) | |
| 6) | Dato' Abu Bakar (Gobah) | 1820–1840 | (男) | |
| 7) | Dato' Eto | 1840–1901 | (男) | |
| 8) | Dato' Wan Omar | 1901–1918 | (男) | (Gemencheh) |
| 9) | Dato' Kamat Hj. Sulaiman | 1918–1947 | (男) | (Johol) |
| 10) | Dato' Hj. Abd. Manap Tolok | 1947–1973 | (男) | (Gemencheh) |
| 11) | Dato' Hj. Abd. Majid Wahid | 1973– | (男) | (Johol) |

Wan Omar が，外来者にもかかわらず，Eto の死後，Pileh に代わって第8代目首長として選ばれたという経緯がある。結局，これが既成事実となって，ジョホルのワリスにプルット・グムンチェーが追加され，2つのプルットから交代で首長を出すこと，及び，次期首長 (*Bakal Undang*) の称号はダトッ・バギンダ・タン・マスとすることが制度化されたのである[28]。この場合，既存のワリスに外部集団が新たに加入・包摂されるという現象は，N. スンビランの母系社会に既に内蔵されている基本的メカニズムが作動した一例と考えることができる。即ちAという母系集団に，Bという（母系または非母系）集団が加入・包摂され（民俗語彙では，'*tumpang*' するという），A を名乗るような現象は，極めて一般的に起こり得るのである[29]。

筆者がここで言わんとすることは，要するに，Wan Omar の時代に，従来のワリスに新たな外部集団（即ちプルット・グムンチェー）が追加され，首長継承法に変更があった際，同時に，今日のプルット・ジョホルの前身であったワリスの一部即ち，ビドゥアンダ・ジュナンと〈6人のワパッ〉のビドゥアンダ系の5スク〔表1の(4)，(8)，(10)〜(13)〕が，逆にワリスから排除される必要があったのだということである。

### 2—4.　ビドゥアンダ系スクとミナンカバウ系スク

本章を終えるにあたって，ジョホル地域における先住民的・土着的・非イスラーム的要素と反ミナンカバウ的とでも呼べるような要素に若干触れておく。

前者，即ち，先住民的・非イスラーム的要素の例として，ジョホルの首長制におけるバティン (*Batin*)，ジュナン (*Jenang*)，ジュルクラー (*Juru-Kerah*) という役職保持者の重要性が挙げられる。これらの役職は元来，非ムスリムの先住民（いわゆる aboriginal Malay あるいは狭義の Proto-Malay）に由来するといわれる[30]。現在のジョホルでは（ダトッ）・ジュナンは既にイスラーム化しているが，先住民首長であるバティンは非ムスリムのまま，ジョホル首長権

の正統性に重要な基盤を提供してきた。たとえば LISTER の 1887 年の報告によると，ジョホル首長の選出に際し，氏族長 (*lembaga*) たちよりも，バティンの方が強力な発言権を持っていた[31]。また 1899 年には，ティガ・バトゥ母系氏族 (*suku Tiga Batu*) の氏族長が，ジョホル首長の承認の下に，バティンによって任命された。また 1915 年の副首長（ダトッ・バギンダ・タン・マス）の選出に際しては，興奮したマレー人群集を，To' Pongkis と称するバティンがすさまじい迫力で沈黙させ，恐怖におののかしめたという[32]。

一方，表 1 に示したジョホルの〈12 スク〉を一瞥して明らかなのは，ビドゥアンダ系スク〔(1)〜(4)，(8)〜(12)〔(13)〕〕と非ビドゥアンダ系スク〔(5)〜(7)〕の対立である。第一に，前者のスク群は，氏族長（亜氏族長）の称号とスク名が同一であるのに対し，後者のスク群，即ち，ティガ・バトゥ，スリ・ムルンガン，ムンカルの 3 スクは，スク名とは別個に歴とした氏族長の称号が存在する。両スク群の対立は，非ミナンカバウ系スク対ミナンカバウ系スクという対立に換言することもできる。後者を構成する 3 スクの氏族長たちは，神話的共通項をもっている。即ち，この 3 スクの祖先である 3 人の氏族長たちは，かつてスマトラのミナンカバウの地から，同じ船に乗ってこの地に到来したのだという伝承を共有している。今日でも，自らの氏族成員に紛争があり，自分 1 人では解決できぬときは，他の 2 人の氏族長に援助を請うことができるともいう。ちなみに，これら 3 人のミナンカバウ系の氏族長たちはビドゥアンダ・ラジャ・バランの氏族長と共に，4 人で首長に仕える〈四氏族長〉(*Orang Tiang Balai*) を構成する。

このビドゥアンダ系とミナンカバウ系の対立については，ビドゥアンダ・ムントゥリの氏族長は「ワリスを含めて，ビドゥアンダはすべて，本来オラン・アスリ (*orang asli*「先住民」) であり，スリ・ムルンガン，ムンカル，ティガ・バトウの 3 スクのみは，ミナンカバウのパガル・ルヨン (Pagar Ruyong) の出身である」と明快に言い切った。事の真相はともかくとして，ビドゥアン

ダ系スクとミナンカバウ系スクの対立は，前者の代表格であるワリスと，後者の代表格であるスリ・ムルンガンの対立という形で，端的に表現されているのが注目される。それは両者間における次のような特殊な婚姻規制に示される。

「ビドゥアンダ・ワリスの女子成員がスリ・ムルンガンの男子成員と結婚することは禁忌（*pantang-larang*）である。このような結婚から生まれた子は，ビドゥアンダ・ワリスの格（*taraf*）を失い，スリ・ムルンガンの格に落ちてしまう。つまり，その子が男の場合，彼は首長への資格を失うのである。何故なら，スリ・ムルンガンはスマトラから到来したスクであり，ナニン地域の首長（*Dato' Penghulu Naning*）[33]という権威者（*orang besar*）を出すスクだからである。」

これは現首長の妹の娘で，イブ・ワリスである Ramlah の夫，Mohd. Noh 氏の説明で〔図2参照〕，彼自身は非スリ・ムルンガン成員であるから，息子は将来，首長になる可能性をもつという注釈つきである。上述の規範の意味するところは，ビドゥアンダ・ワリスも，ミナンカバウ系のスリ・ムルンガンも，それぞれジョホンとナニンという地域の差異はあるにせよ，首長を出す母系スクであり[34]，両者が通婚で結ばれることには否定的な発想である。このあたりに，ジョホルのワリスの反ミナンカバウ的とでも呼びうる性格を垣間見ることができる。

## 3.　即位儀礼の可変性

さて，前章までに行なったジョホルの伝統的政治・社会機構の歴史的及び構造的検討と絡める形で，ジョホル首長のクルジャン儀礼（*Istiadat Kerjan*：〔首長の〕即位儀礼）[35]を考察してみることにしよう。

ジョホルでは首長が死亡すると，その埋葬の前にダトッ・ジュナンによって，副首長（ダトッ・バギンダ・タン・マス）が新首長となったことが宣言される。

埋葬に際しては，「死んだ首長は首長が埋葬する」(*Undang yang mati, Undang yang menanamkan*〕という慣習法によって，この新首長が故首長を埋葬する形式をとる[36]。要するに，故首長の埋葬時に既に新首長は成立することになるのだが，その後，暫く時間をおいて，新首長の即位儀礼であるクルジャン儀礼が行なわれるのである。

ジョホル首長のクルジャン儀礼に関しては，1918年に行なわれた第9代首長 Dato' Kamat bin Haji Sulaiman (在位 1918-1947) のものが，我々の入手し得る最古の情報である[37]。彼の前代の Wan Omar (在位 1901-1918) が首長となった際には，形式上の即位式は行なわれなかったし，更に2代前の Eto〔Eta〕の場合は，在位期間が 61 年間 (1840-1901) と長期に及んだため，彼の即位儀礼が仮りにあったとしても，それを見た者は最古の情報源である NATHAN & WINSTEDT の時代には既に生存しておらず，その内容は全く不明である[38]。NATHAN & WINSTEDT は，Kamat のクルジャン儀礼についても，それがどこまで伝統的な儀礼を継承しているのか疑問を挟みながらも，以下のように報告している[39]。

### 3—1. Dato' Kamat のクルジャン儀礼 (1918)

儀礼全体は，祈りも含めて，おそらくトッ・パワン (*'To pawang*：「(首長仕えの) 呪術師」)[40]〔以下パワンと略記する〕の発明によるものだった。バティンはそのような芝居がかった発明の才を欠いており，ほとんど役割を果たさなかった。

Wan Omar が 1918年2月に死亡し，Kamat がその3月に Kampong Tanggai の女ワリス長 (*Kepala Waris Perempuan*) である Kidam の家で即位した。

小川の側の草の生えた小塚にゴザが敷かれ，Kidam の家からこの小塚まで行列行進が行なわれた。先頭にムアル (Muar) のバティン (*Batin*) と彼の閣員たち[41]，ジュナン (*Jenang*) とジクラー (ジュル・クラー)〔*Jikrah/Juru Kera-*

*h*〕が，次にパウンの Haji Husin が，次に新首長がトキン〔*tokin*：首長の宝器である鉄杖で，*tokeng* とも記す〕を持ち[42]，Kidam に手を引かれて続き，次にパングリマ・プテー (*Panglima Puteh*) とパングリマ・ヒタム (*Panglima Hitam*) その他が，首長の宝器であるクリスと槍を運んで続いた。全員，青の木棉の衣装を着用していた。首長は内側に絹の衣装を着けていた。

小塚に着くと，首長はゴザの上に胡坐をかき，パウンがその前に跪き，バティンが片側に坐った。他の人々は数ヤード後方に下がった。パウンは，まず香を焚き，ゴザの脇の大地に突き立てたトキンをそれで燻らした。それから3回，首長に向って敬礼し，彼を抱いて，その両頬に1度ずつキスした。最後にアダットの俚諺と聖句を混じえた長い祈禱文を朗唱した。この後，パウンは首長の頭の周囲で香炉を7回まわし，それから呪水 (*tepong tawar*) を3回まわしてその頭に呪水を散布した。首長は木棉の上着，ズボン，クリスを外し，パウンと共に小川に行き，そこでパウンが彼の頭に水を撒いた。それから首長のクリスとターバン（これは *Dendam Ta' Sudah* として知られる形で結ばれていた）を香で燻らし，それらを首長に戻した。これで即位は完結した。

後にジョホルの氏族長や亜氏族長たちによる，慣習化された拝謁 (*mengadap*) が，（新）首長の右脇にトッ・グンパ (*Gempa*) を，左脇にトッ・マントゥリ (*Mantri*) を従えて行なわれた。女ワリス長は首長の直接後方に坐り，ムアルのバティンが彼女の右脇に，トッ・ジュナンが彼女の左脇に並んだ[43]。

### 3—2.　Dato' Haji Abdul Manap のクルジャン儀礼 (c. 1953/54)

次の10代目首長，Dato' Haji Abdul Manap〔在位 1947-73〕のクルジャンに関しては，BAHARON AZHAR (1973) による断片的な報告を通じて[44]，その概略を知ることができる。BAHARON の記述は，この儀礼で重要な役割をつとめたバティン(Kanchil 氏)自身をインフォーマントとしたものである。儀礼は1953年もしくは1954年頃に行なわれたというのであるから，Abdul Manap

の現実の即位（1947 年）から既に 6～7 年経過して行なわれたことになる。Kamat の場合，即位後，間もなく儀礼が為されたのと大きな差異があることが注目される。以下，BAHARON の報告の要約を記す。

儀礼はクラマット（*keramat*：「聖地」「聖墓」）であるダトッ・ナラ・クダイ〔スクダイ〕(Dato' Nara Kudai/Sekudai) の墓の小さな小屋の中で行なわれた。

首長は既に水で満たされた 7 つの陶製の容器の水で，バティン (Kanchil 氏) によって，まず灌水を施された。その間，バティンはダトッ・ナラ・クダイと男女の祖先の名を呼び出し，秘密の聖句を唱えた。

灌水儀礼が終わると，バティンは彼自身の家宝（プサカ：*pesaka*）のクリスを右手に把み，焚かれた香の容器を左手に持った。彼はそのクリスの刃の先端を首長の頭の上方に立てて持ち，それから燻らした香の容器を首長の頭の周囲で 7 周させ，同時に別の秘密の聖句を唱えた。この後，バティンが Dato' Manaf〔=Dato' Abdul Manap〕を首長として宣言した。それから儀礼参加者たちは首長の屋敷に戻り，そこで皆は共食 (*makan sajambak*) した。首長とバティンは特別の皿で共食した[45]。

### 3—3. Dato' Haji Abdul Majid のクルジャン儀礼 (1975)

第 11 代首長 Dato' Haji Abdul Majid bin Wahid〔在位 1973-〕のクルジャン儀礼については，マラヤ大学の WAN ABDUL KADIR Yusof と ABDUL RAHMAN Kaeh の詳細な報告が残されている[46]。これは 1975 年 4 月 1 日から 7 日にかけて，約 1 週間にわたって行なわれたもので，即位から約 2 年経過している。場所は Kampung Iyor にある旧首長屋敷 (*Balai Undang*) の敷地内で行なわれた。7 日 7 晩にわたる儀礼期間のうち，中心部分は最初の 3 日間に集中した。

（第 1 日）

初日は 1975 年 4 月 1 日の午後に始まる。午後 2 時半，氏族長や小姓 (*Juak-*

*Juak*) などが屋敷に到着し，首長の宝器 (*alat-alat kebesaran*) が飾り立てられ，首長は黄色一色の衣装を身につけ，パウンが呪文を詠じる儀礼が行なわれた。

午後4時頃，首長は氏族長たち，〈6人のブアパッ〉，小姓やその他の亜氏族長たちを従えて，両親の墓のある Kampung Tanggai に墓参りに行った。次に前首長 Abdul Manaf〔=Manap〕の墓参りに Kampung Pasit に赴いた。これらの墓前で *tahlil*[47] が唱えられ，祈禱 (*doa*) が行なわれた。この後，首長は屋敷に戻り，号砲9発によって，クルジャン儀礼の開始が告げられた[48]。ちなみに，この初日の晩にはイスラームの行事が集中した。夕刻（マグリブ）の礼拝が屋敷で行なわれた後，*Yassin* の章が読まれ[49]，更に *tahlil* と祈禱 (*doa*) が続いた。更に招待された著名な男女のクルアーン詠唱者 (*kari/kariah*) によるクルアーン詠唱や宗教歌の合唱，イスラームの説教が行なわれ，N. スンビランの宗教広報局の映画上映をもって，深夜1時頃散会となった[50]。

（第2日）

この日は最も重要な儀礼が行なわれた。午前8時頃，首長の行列が，屋敷から約1.5マイルの地にある Gobah の墓に造られた灌水堂 (*Balai Bersiram*) へと出発した。道路の両側は学童や民衆が並んだ。行列の先頭には，シリー容器 (*Tempat Sireh*)，香炉，ライム水 (*bedak limau*)，スゴロック水 (*air segolok*)[51]，パンダヌスのゴザなどを持つ女達が歩き，後にパングリマ・トゥンガーとパングリマ・ダラムが続いた。首長の両脇は，ダトッ・グンパとダトッ・ムントゥリが固め，バティン (*Datuk Batin*) が傘をさしかけた。これに続いて，ダトッ・ジュナン，イブ・ワリス達，他のダトッや亜氏族長たちが首長の宝器を携行した。更に後方にはパングリマ・プテーとパングリマ・ヒタムと小姓などが従った。パウンも首長に付き添った。後方には州大臣 (*Menteri Besar*) や役所の長たち，その他の民衆が続いた[52]。

Gobah の墓というのは第6代目首長 Abu Bakar の墓であり，この近くに簡易の灌水堂が造られた。その四隅には赤・黒・黄・白の旗が具わり，色彩豊

かな布の装飾が施された。この灌水堂は，ダトッ・ジュナン，ダトッ・バティン，トッ・ジュルクラー，ダトッ・グンパ，ダトッ・ムントゥリ及びトッ・パウンによって造られた。行列でここに到着した首長はグンパ及びムントゥリに付き添われて，この灌水堂上の大ゴザの上の小ゴザに腰を下ろし，バティン，パウン，及び〈4人の呪医〉(*dukun yang empat*) の1人によって，呪水塗布儀礼 (*istiadat menepung tawar*) が施された。この儀礼に際し，首長，副首長，ジュナン，及びパウンの4人は黄色一色の衣装であった[53]。

この儀礼が終わると，首長はそこから約 50 ヤードほどの所にある Godang の泉 (*Perigi Godang*) に行き，そこでパウン，バティン，及び〈4人の呪医〉の1人によって，浄化儀礼，あるいはライム水による沐浴儀礼 (*istiadat berlangir/mandi berlimau*) が行なわれた。その後，首長自ら，Godang の泉からココナツの容器で水を汲み，沐浴した[54]。

灌水終了後，灌水堂内で，ジュナンとバティンの助けを借りて，首長は衣を替え，再び小ゴザ上に坐って，パウンが（新）首長のダウラット〔*daulat*：神秘的な力〕を「上げる」(*menaikkan*) 儀礼を行なった[55]。その後，首長はこの墓での儀礼終了を示すように，シリー (*sirih*) を口にした。同時に民衆は「ダウラット・ダトッ・ウンダン」(“*Daulat Datuk Undang*”) を3回叫び，9発の号砲が首長屋敷で鳴らされた。終了後，首長一行は徒歩で屋敷に戻ったが，途中，学童や民衆が「ダウラット・ダトッ・ウンダン」を叫んだ[56]。

パウンの説明では，Gobah の墓は精霊が棲み，ダウラットがあるという。このダウラットは善行を通じて得られる不可視の存在で，敬虔 (*suci*) な者にのみ「上げる」ことが可能である。このダウラットはパウンに呼び出される精霊 (*jin*) と関係があるという。即ち，呼び出されて初めて，このダウラットは「上げる」ことができる。パウンがダウラットの到来を告げると，首長は暫くの間，倦怠感を覚え，あるいは理性を失ったかのようになるが，パウンに肩か頭を叩かれると意識を回復する。ダウラットが来たとき，首長の顔つきは変化したと

いわれる。仮りに首長がその資格に欠ける場合，彼は危険にさらされる。ダウラットを「上げる」間，パウンこそが首長の安全を見守るのである。パウンがダウラットを「上げた」際，首長はこの上なく喜ばしい気持になったことを告げた。香が焚かれる間，首長は常に神 (*Tuhan*) を念じていたという。Godang の泉に赴いた際は，彼は馬にまたがっているような気持だと告げた。灌水・沐浴を終えた後は，メッカのモスクで暁の礼拝をしている感じだったという[57]。

首長一行は午前 11 時頃，屋敷に戻り，グンパとムントゥリを両脇にして，屋敷前に設置されたグヌン・ブランカット船 (*Bahterà Gunung Berangkat*) に上がり込み，拝謁儀礼 (*istiadat mengadap*) が行なわれた。この船（より正確には船型の台座）は，現首長自身の考案で自身の作であり，次のような伝承を記念する意図が含まれていた。即ち，

ミナンカバウのパダン・パンジャンの地に *Tok Temenggong* と *Tok Perpateh* という2人の兄弟が住んでいた。*Temenggong* の子どもが *Perpateh* の犬に咬まれたことが原因で2人は争い，ラジャ・ヒンディに調停を依頼した。ラジャ・ヒンディは，1つのクニ (*negeri*) を2人の王 (*raja*) が支配することはできないという口実で，2人ともこの地を去るように命じ，臣下たちに2艘の船を準備させた。*Temenggong* の船は容易に進水したが，一方，*Perpateh* の船はどうしても動かなかった。夜になってラジャ・ヒンディは，夢のお告げで，問題の船には初めて妊娠した女 (*perempuan bunting sulung*) を犠牲として供えなければならぬことを知った。結局，*Perpateh* 自身の母系氏族成員 (*anak buah*) であるスリ・バヌンという女性が，あらかじめ死装束を着せられて，船の下敷として犠牲となった。パウンがその船の周囲を7周し，青ココナツの葉7枚で7回引くと，船はスリ・バヌンの身体を跳び越えて，速やかに進水した。その際，スリ・バヌンは子どもを出産したが，その子はラジャ・ヒンディによってムンハランという名を与えられた。ちなみにこのエピソードによって，*adat perpateh* においては，慣習法上の財産

(*pesaka adat*) は女性に譲られるのである[58]。

上述の伝承は *adat perpateh* と *adat temenggung* という2つのアダット(「慣習法」) の分裂を語るものであるが[59]，この伝承に依拠して造られたグヌン・ブランカット船は，母系制アダットの *Perpateh* の船を象徴する。つまり，クルジャン儀礼で用いられたこの船型の台座は，伝承にあるような，ミナンカバウの地における〈出来事〉を再現するものである。従ってこの船型台座の前方には，進水する状況を模して噴水が作られ，犠牲のスリ・バヌンを象徴するように，白布で包まれた木が置かれた[60]。そして，この台座に首長とグンパ，ムントゥリが乗り込み，全氏族長，小姓，来賓たちの前で，パウンが伝承にあるように青ココナツの葉7枚で7回，その船を引く動作をし，初めてジュナンが，Dato' Haji Abdul Majid がジョホル首長となったことを宣言した[61]。

この後，以下のダトッ達が，船型の台座上の首長に拝謁 (*mengadap*) を行なった。

1. バティン
2. ジョホル及びグムンチェーのイブ・ワリス達
3. 副首長
4. ダトッ・ラジャ・バラン
5. ダトッ・スナラ〔ダトッ・ラジャ・スナラ〕
6. ダトッ・アンディカ
7. ダトッ・バギンダ・ラジャ
8. ダトッ・パドゥカ・ブサル
9. ダトッ・シンダ・マハラジャ
10. ダトッ・スリ・マハラジャ
11. ダトッ・ムントゥリ・バタン・ムラカ
12. 〈6人のブアパッ〉
13. 他の氏族のブアパッ (亜氏族長) 達

これに続いて，首長の妻（称号トッ・プアン）が，グンパとムントゥリの妻たちを両脇に従えて，台座上で同様の拝謁を受けた。以上が終了すると，N.スンビランのムフティ（*Mufti*）による祈禱（*doa*）の朗読によって，第2日の儀礼が終了し，号砲9発が鳴った。首長は民衆と共に昼食をとった[62]。

（第3日）

この日は首長への表敬（*menyembah*）の日である。早朝，氏族長，小姓，ワリス成員達が屋敷に到着した。やはり船型台座上で，首長への拝謁が，男女のワリス成員，カディ（*kadhi*），イマーム（*imam*）達によって行なわれ，続いて同じ人々によって，首長の妻への拝謁が行なわれた。この日は州大臣も目撃にやって来た。拝謁式後，以下の人々による祝辞が述べられた。

1. クルジャン儀礼執行委員長
2. 副首長
3. イナス首長
4. グムンチェー首長
5. アイル・クニン首長
6. Kuala Pilah 郡（*Daerah*）の役人
7. Tampin 郡（*Daerah*）の役人
8. 華人代表
9. インド人代表

これらの首長や他の関係者は贈物を首長に献上した。この後，昼食会。警察のバンド演奏やマレーシア空軍のヘリコプターのショウなどが演じられた[63]。

（第4日）

この日は儀礼はなし。スポーツ大会やコマ回し大会などが行なわれた[64]。

（第5日）

この日も儀礼はなし。スポーツ大会など[65]。

（第6日）

午前中，首長は氏族長や小姓を連れて，屋敷から約2マイル離れた Tanggai にある自らの生家を訪問し，そこで *tahlil* の会が催され，首長は彼の氏族成員の表敬（*menyembah*）を受け，彼等によって，家宝（プサカ）を取り出す儀礼が行なわれた。この後，昼食会[66]。

（第7日）

最終日は，氏族長，亜氏族長，一般民衆に対し，首長の演説があった。午後，すべての宝器が取り外され，小姓たちによって再び屋敷内に戻された。夜のカルチュラル・ショウの後，N. スンビランのムフティによって平安の祈禱（*doa selamat*）が朗読され，クルジャン儀礼は終了した。深夜12時1分丁度に，これを告げる号砲9発が轟いた。ちなみに全7日間の初日を除く毎晩，屋敷の敷地内では歌，舞踏，コミック・ショウ，パンチャ・シラット（マレー式空手）などの見世物が演じられた[67]。

### 3—4. 考察

以上，現首長に至る連続3代のクルジャン儀礼を概観してきたが，この限定された資料から次のことがいえる。即ち，Kamat のクルジャン（1918年）から，Abdul Manap (c. 1953/54 年）を経て，Abdul Majid（1975 年）に至るわずか2分の1世紀強ほどの短期間の間でも，クルジャン儀礼は決して固定化した内容のものでないことは，まず明らかであろう〔表3参照〕。

まず儀礼の時期であるが，Kamat の場合，即位した年にクルジャンが行なわれているのに対し，続く2代の首長については，即位後2年から7年ほどの期間をおいて，ようやく行なわれている。儀礼の場も一定の聖地で行なわれてはおらず，三者三様の場所がとられている。それでも，ある程度の共通性は指摘可能である。Abdul Majid のクルジャンに際しては，Gobah の聖墓とこれに隣接する Godang の泉が使用されている。Gobah の墓は，第6代首長 Abu Bakar の墓であるが，彼はダウラットが強力な人物で[68]，また「クラマット

**表 3　クルジャン儀礼の変遷**

| 項目＼首長名 | Kamat<br>(第9代) | Abdul Manap<br>(第10代) | Abdul Majid<br>(第11代) |
|---|---|---|---|
| 儀礼の時期 | 1918<br>(即位の年) | c. 1953/54<br>(即位後6～7年経過) | 1975<br>(即位後2年経過) |
| 出身リニージ | perut<br>Johol | perut<br>Gemencheh | perut<br>Johol |
| 儀礼の場 | Kg. Tanggai<br>(女ワリス長宅)<br>{小塚<br>小川<br>〈ゴザ〉 | [Kg. Durian Besar?]<br>Dato' Nara Kudai<br>[Sekudai] の墓<br>(*keramat*)<br>〈小屋〉 | Kg. Iyor<br>(Balai Undang)<br>{Gobah の墓<br>(*keramat*)<br>Godang の泉<br>〈灌水堂〉 |
| 行列行進 | 有 | ? | 有 |
| 灌水儀礼の祭司 | Pawang | Batin | Pawang<br>(Batin/「四人の呪医」) |
| 7のシンボリズム | 首長の頭に香炉を7周。 | 7つの陶製容器の水で首長に灌水。<br>首長の頭に香炉を7周。 | 7日7晩の儀礼期間。<br>ココナツの葉7枚で，7回船を曳く。 |
| 衣装の色 | 全員青色 | ? | 首長，次期首長 Jenang，Pawang } 黄色 |
| 拝謁儀礼 | {Gempa (右)<br>Mantri (左)<br>女ワリス長，Batin，Jenang (後) | ? | {Gempa (右)<br>Menteri (左) |
| その他 | Pawang が首長の頬にキス | Batin 自身のクリスの使用が重要 | 船型台座（ミナンカバウ）の使用<br>*daulat* の重要性<br>メッカの連想<br>両親，前首長の墓参り。 |

(超自然力) のある人」であったといわれる[69]。その証拠に，この墓石は少しずつ高く成長するという[70]。Abdul Majid のクルジャン儀礼の式次第を記すパンフレット (*Cenderamata Istiadat Kerjan*, Apr., 1975) には，「Godang の泉は，ジョホル首長のクルジャンが行なわれる度に，灌水儀礼の行なわれる場所である。」と記されているが，上に見たように，実際は前2代の首長たちのクルジャンでは使用されていないようである。しかしながら，クルジャン儀礼一般において，聖墓と水場が儀礼空間として重要性をもつのは，ある程度の伝統性を備えていると考えられる。前代の Abdul Manap の時は，ダトッ・ナラ・クダイ〔スクダイ〕という神話的人物の聖墓 (*keramat*) が用いられているし，Kamat の時代では「小塚」と「小川」が使用されたとあり，この「小塚」は墓地であった可能性もある。

一方，これら3代の首長のクルジャンにおいて，決定的ともいいうる差異が存在する。それは首長に灌水を施す祭司役の変化である。即ち，Kamat の場合は，パウンが首長の頭の周りで香炉を7周させ，呪水を3周させて，灌水を施しているのに対し，次の Abdul Manap の時はパウンではなくバティンが7つの陶器に入った水で首長を灌水し，その後，バティン自身のクリスを右手に担い，左手に持った香炉を首長の頭の周囲で7周させ，聖句を唱えたとある。ところがその次の Abdul Majid の場合には，灌水・沐浴儀礼は，パウン，バティン，及び〈4人の呪医〉の1人によって行なわれている。つまり，前2代の首長のクルジャン双方の要素を摂取している。それでも，この Abdul Majid のクルジャンで重要な，灌水堂内においてダウラットを「上げる」儀礼自体は，パウンによって行なわれており，儀礼の中心的祭司がパウンであることが示される。要するに，3代の首長のクルジャンにおいて，儀礼祭司に相当する人物は，パウン—バティン—パウンと変化しているのである。

パウンとバティンの重要な差異は，前者はムスリムであり，後者は非ムスリムの先住民の長たる位置にあるということである。ジョホルのパウンは，ビド

ゥアンダ・パドゥカ・バンサ〔＝クバンサ〕母系氏族という，イスラーム化したジョホルの〈12 スク〉の一部からしか出ない[71]。一方，バティンはこの〈12 スク〉には属さぬ，しかし古くからある権威ある地位である。この事情を考慮してみると，パワン—バティン—パワンというクルジャン儀礼における中心祭司の交替現象は，どうも首長の出身プルットと関係がありそうである。即ち，前章で見てきたように，Wan Omar 以後，ジョホルのワリスに新しくプルット・グムンチェーが追加され，以後，従来から伝統的に存在したプルット・ジョホルと，新参のプルット・グムンチェーという2つの母系集団の間で交替（*giliran*）で首長を出すことになったという事実を，ここで想起したい。Wan Omar（プルット・グムンチェー）の死後，プルット・ジョホルの Kamat が首長として即位すると，ただちにクルジャン儀礼を行なったのは，首長継承法に変革のあった時代の不安定性を逆に物語るものともいえようか。この Kamat のクルジャンでパワンが重用されると，次の Abdul Manap（プルット・グムンチェー）では，パワンの代わりに，より伝統的な権威であるバティンを用いたのは，プルット・ジョホルに対するプルット・グムンチェー側の正統性の示威と解釈される。一方，現首長 Abdul Majid が再びパワンを重用しているのは，先々代の同一プルット出身首長の慣行に倣ったものともいえるし，先代の出身である新参のプルット・グムンチェーとの差異性を意識的に示すものだったのであろう。また，別の観点からすれば，首長を出すワリスの中でも，より伝統的なプルット（ジョホル）ほど，パワンという，既にイスラーム化した〈12 スク〉の構成員を，その首長権の正統性の拠り所としているのに対し，新参のプルット（グムンチェー）ほど，より伝統的，土着的な権威（バティン）によって，その正統性を主張しているともいえる。

結論として，第一にジョホルのクルジャン儀礼は，ある程度の共通項は内包しながらも，その都度，大幅に変更・創出されて行く性質を持ち，決して固定化した「伝統的な」ものではないことが指摘できる。第二に，儀礼自体のこの

ような可変性は，首長のワリスに，2つのプルットによる交替制度（*giliran*）が導入された現象とも密接に関わりがあったということを挙げることができる。

## 4. 首長の現在

本稿の結びに代えて，現首長 Dato' Haji Abdul Majid 氏に我々の焦点を固定して，彼自身の歴史＝世界認識に関して若干の思弁を加え，現時点における N. スンビランの一地方首長が展開する文化的・社会的指向性を探っておこう。

前章で考察したクルジャン儀礼（1975）で注目されるのは，それ以前とは明らかに異なる革新的儀礼装置として，首長自身の考案による船型台座が使用されたことである。これはジョホル首長の土着的・先住民的要素（具体的にはバティンの伝統的権威に代表される）からの乖離と，ミナンカバウという外来的要素（これはミナンカバウ起源といわれる王権に代表される）への象徴的接近を，まさしく演劇的手法で示すものであった。これは首長が自らを定義づける革新的ともいいうる歴史解釈の結果であり，そのイデオロギー的表現として，重要な意味を持つ。1979 年に N. スンビラン州政府から供せられた新しい首長屋敷（*Balai Undang*）の敷地内には，上記のクルジャンで使用された船の台座が，現在もそのまま保存されて，建物の前を飾っている。のみならず，この船の周辺には，初代首長 Siti Awan の墓や第7代首長 Dato' Eto の墓を模したものも並べられてある。この Eto はジョホル首長の継承法が変化した Wan Omar の直前の首長であり，伝統的なプルット・ジョホル出身であったばかりでなく，第6代首長 Abu Bakar (Gobah) と並んで，歴代の首長の中でもとりわけ，ダウラットが強かったと伝えられる人物である。ジョホル首長の初代からこの7代目までは，プルット・ジョホルが首長権を独占していたことを考えれば，この初代首長と7代目首長の墓を特に選んで記念しているのは，現首長が自己の出身プルット（ジョホル）の伝統性を積極的に強調する姿勢の現われ

といえよう。一方，これらの墓石の脇には，Sungai Udang (Linggi) で発見されたイスラーム布教の形跡を示す碑文の模型も立てられてある。現首長がムスリムとしての側面を特に強調する態度は，クルジャン儀礼における灌水・沐浴の際の発言，特に「メッカのモスクで暁の礼拝をしている感じだ」という表現に端的に現われている。他方，林立する地方首長の，〈模範的中心〉(C. GEERTZ 1980) としての王権への上昇指向性も指摘しておく必要がある。それは，首長の宝器としての傘の色，クルジャン儀礼における衣装の色，屋敷の階上に設置されている首長の台座の色などに惜しみなく使用される royal color (黄色) において，可視的に示されている (1918 年の Dato' Kamat のクルジャンに際しては，全員青色の衣装を着用していたことが窺われ，首長による royal color の使用がそれほど古いものではないことを示す)。このような儀礼装置を例として見られる王権への指向性は，王がイスラームの領域における最高の長として位置づけられていることを想起すれば，首長のイスラーム色を一層強化する方向性を導く一因となっていることを併せて意味する。但し，この場合でも，王権の存立基盤自体は，〈四首長〉を構成する地方首長（勿論，ジョホル首長を含む）によって正統化されるのであって，その逆，即ち，これらの首長権が王によって，本質的な正統性を与えられているのではない。クルジャン儀礼で明瞭に確認されたように，それはあくまでも〈下から〉，その土着的要素と母系イデオロギーの連合によって正統化されているのであり，この点は銘記して然るべきである。

最後に，クルジャン儀礼の壮麗化傾向に一言触れておく必要がある。我々が認識しなければならない事実は，19 世紀後半の英国によるマレー半島の本格的植民地化とほぼ連動して，王—地方首長—氏族長のヒエラルキーを軸とする伝統的政治・社会構造とは独立に，近代的行政機構が発達するに及び，これら伝統的権威の社会・政治的機能が次第に相対的に低下するに至った現実であろう。この点で示唆的なのは，19 世紀以降の英国王室と儀礼の関係である。即

ち，D. CANNADINE によると，英国王室が政治上，実際の影響力をきわめて強く保持していた 1870 年頃までは，首都で大王室儀礼が繰り広げられることは少なかったのに対し，その後，第一次大戦までの 30 年間に状況は一変し，王室が権力の第一線から退いて行くのと軌を一にして，王室儀礼が隆盛し，壮麗化していったというのである[72]。この英国王室儀礼の美麗化現象が，直接，N. スンビランの宮廷儀礼などに与えた影響も，当然予想されるのであるが，それより興味深いのは，権力の大きさと儀礼の壮麗化とがいつでも比例関係を示すのではなく，両者の間には，しばしば負の相関がありうるという事実である。少なくとも，本論文で考察して来たクルジャン儀礼は，このような性質のものであったと解釈される。

(註)

1. 但し，Tampin の長 (*Tengku Besar Tampin*) や Linggi の首長 (*Dato' Muda Linggi*) などは母系制によらない。
2. P. E. DE JOSSELIN DE JONG 1960 参照。
3. *Ibid:* 151–163, 212.
4. "Pertabalan Tuanku Ja'afar ibni Al-Marhum Tuanku Abdul Rahman, 8hb. April, 1968" 参照。
5. これは 1898 年，英国の介在によって結ばれた王と首長たちとの契約書で確認され，1959 年の N. スンビラン州憲法において明文化されるに至っている [第 7 条及び 8 条]。
6. 富沢 1984b.
7. たとえば NEWBOLD (1834) の記述によると，"Rajah Malaywar" (即ち，ラジャ・ムレワル) を支持した〈四首長〉はルンバウ (Rumbowe)，スンゲイ・ウジョン (Sungie Oojong)，ジョホル (Johole) 及びスリ・ムナンティ (Srimenanti) とある [p. 256]。
8. NATHAN & WINSTEDT (1920) [in] WILKINSON (ed.) 1971: 399.
9. *Ibid,* 及び富沢 1984b: 137.
10. 18 世紀になって Jelai が滅亡し，西暦 1760 年頃に Inas が台頭し，やがて 1780 年頃に，今度は Johol がそれに代わって台頭して，Inas はその勢力下に入ったとい

われる [HOOKER 1972: 162, LEWIS 1960: 65–94.]。

11. ABDUL SAMAD Idris 1968: 130.

12. 但し，たとえばテラチ (Terachi) 地域の首長は，ビドゥアンダ（ワリス）からではなく，スリ・ルマック・パハン (Sri Lemak Pahang) というミナンカバウ系の母系氏族から出るというように [HOOKER 1972: 137]，例外もある。WINSTEDT は，ビドゥアンダという名称がスマトラに由来するものではなく，かつてのマラッカ宮廷の残存であるとする。即ち，かつてのマラッカでは非ムスリムかあるいは，イスラームに改宗して間もない者で，宮廷で保護された人々を指す丁寧語であったという。一方，アラビア語原のワリスは，マラッカ王朝時代のブンダハラ (*Bendahara*) の高貴な家系に由来するという [WINSTEDT 1934: 43, 82]。なお，ジョホル首長と同様に〈四首長〉の1人を構成するジュルブ (Jelebu) のワリス・ビドゥアンダは，首長の被選出権を持つ3つの母系氏族群 (*Waris Berundang*) と被選出権は持たないが特権的な影響力を持つ2つの母系氏族群 (*Waris Silasila*) から構成されるというように，先住民層とみなされる人々の間に分化が見られる [SWIFT, M. G. 1965: 13–16]。

13. DE JOSSELIN DE JONG 1960: 123–4.

14. これには現ジョホル首長 Dato' Haji Abdul Majid bin Wahid 氏をはじめ，各氏族長並びに呪術師 *Dato' Pawang* Kudus 氏ほか関係者の方々の協力を得ることができた。ここに簡略ながら謝意を記したい。

15. インフォーマントは *Dato' Baginda Raja* Hj. Khalid 氏。

16. この近代的制度の下敷となった慣行については，詳細は残念ながら不明である。年金の年額は約160 M$ 程度と少額である。これは，SWIFT の Jelebu に関する記述によると [1965: 14–15]，ビドゥアンダの優越的地位を示すもので，かつては収穫物 (*hasil tanah*) で納められていたものが，1891年から金納になったという。SWIFT の調査期間 (1954–60) では，Jelebu では1ケ月20 M¢ であったという。

17. インフォーマントは *Dato' Andika* Mohd. Yusof 氏ならびに現首長。

18. 一方，NATHAN & WINSTEDT (1920) [in] WILKINSON (1971): 405 においては，スリブガラン ("Sa-ibu Garang") のみならず，パドゥカ・バンサ及びヌガラン ("Menggarang") を加えた3つの集団が，ジュナンの氏族長 ("'*To Jenang*") の配下にあったことが示されており，また，HOOKER (1972: 163) は，"*To' Jenang*" がワリス（ビドゥアンダ）の長 (*kepala*) であり，更に6つのビドゥアンダのブアパ（ワパッ）の長でもあるとして，少なくとも現状とは一致しない報告を示している。

19. WINSTEDT 1934: 43, DE JOSSELIN DE JONG 1960: 129.

20. NATHAN & WINSTEDT (1920) [in] WILKINSON (ed.) 1971: 406–7. HOOKER 1972: 164.

21. HOOKER *Ibid.*

22. これに対して，ビドゥアンダ系の *Dato' Gempa, Dato' Menteri, Dato' Jenang* の3人は "*Orang Besar Balai*" の役職を構成する。

23. 但し，現首長の息子で，ティガ・バトゥ氏族長の *Dato' Baginda Raja* Hj. Khalid 氏の説明では，「副首長はワリス成員，〈6人のワパッ〉，ジュナン，及びバティンとイブ・ワリスの全員一致 (*kebulatan*) によって，3ケ月 10 日以内に就任が決まる」という。この点の意見の相異は問題として残される。ちなみに，現首長によれば，彼が副首長の地位に選出されたときは，ワリス成員間で意見の一致があったのではなく，結局，当時の新首長 Dato' Haji Abdul Manap が実際に彼を副首長として選んだという。また彼自身が新首長になった際も，新副首長選出に際して，やはりワリス成員の意見が一致せず，3ケ月 10 日の期間を過ぎたので，現首長自身が，現在の副首長を選んだという。

24. インフォーマントは Mohd. Noh bin Yaakob 氏。彼はイブ・ワリスを妻に持つ。

25. たとえば，この母系社会で，家屋・土地などのプサカを相続する女性がいない場合，一つの解決法として，"*Kadim Awor Serumpun*" という方法がある。これは外部から女子の非スク成員を，然るべき儀礼手続きによって，スク成員として組み入れること (=*kadim*) により，彼女の代のみならずその母系子孫にまで，プサカの継承が許される制度である。*Serumpun* という語に外来性を見るのは，この制度を連想させるからである。ちなみに "*Kadim Pinang Sebatang*" という方法では，*Kadim* された女性の代限りで，プサカの継承が許される [インフォーマントは，現首長秘書の Zainal bin Hj. Yatim 氏]。

26. インフォーマントは *Dato' Andika* Mohd. Yusof 氏。この表2の絶対年代は，ABDUL SAMAD Idris [1968: 134] と一致している。

27. 第4代目首長 Rambutan Jantan から第7代目首長 Dato' Eto までは，最初の3人の首長が女性であったことを記念し，また敬意を表する意味で，皆，長髪にしていたといわれる [ABDUL SAMAD Idris 1968: 137]。また，最近でも第9代目の Kamat も，頭の中央の髪の一部分のみを長く伸ばして，更にそれを中央で丸めていたという [インフォーマントは *Dato' Menteri* Lebai Mudah bin Hj. Janan 氏]。

28. ABDUL SAMAD Idris 1968: 139–142.

29. ABDUL KAHAR Bador 1963: 57. 先述のビドゥアンダ・スルンプンについてもこのメカニズムが機能した可能性がある [注 25 参照]。

30. NATHAN & WINSTEDT (1920) [in] WILKINSON (ed.) 1971: 396–7.

31. *Ibid.*

32. *Ibid.*

33. 現在の Naning は，近代行政機構上は N. スンビラン州と隣接するムラカ（マラッカ）州の一部を構成するが，元来は N. スンビランの母系制アダット（*adat perpateh*）の地域の一部であって，現在も慣習法上の首長（*Penghulu*）が存在する。この首長は，スリ・ムルンガン母系氏族に独占されている。ちなみに Naning は，N. スンビランの初代王がスマトラを発し，現在の N. スンビランに入る際に経由した重要地点でありミナンカバウ色の濃厚な地域である。

34. ジョホルのスリ・ムルンガンの氏族長，*Dato' Andika* Mohd. Yusof 氏によると，スリ・ムルンガンの氏族長は，昔，ラジャ・ムレワルと共にスマトラからやって来たスクであるため，スリ・ムルンガンの長のみは，他の氏族長と異なって，王のダウラット（*daulat*——後述）に打たれてしまうことはないという。

35. 地方首長の即位（儀礼）が *kerjan* と呼ばれるのに対し，王の即位（儀礼）は *tabal* もしくは *pertabalan* と称し，用語上の区別が存在する。

36. N. スンビランの王についても同様。即ち，王が死ぬと，その埋葬の前に〈四首長〉の合議で新王が決定・宣言され，その新王が故王を埋葬する儀礼慣行となっている。ルンバウ（Rembau）の地方首長についても，同様の "*Undang mangkat Undang memakamkan, Undang baru dipileh sa-belum Undang di-makamkan*" という俚諺があるが，この慣行はもはや行なわれていない [ABDUL SAMAD Idris 1968: 175]。

37. NATHAN & WINSTEDT (1920) 1971: 404–5.

38. *Ibid.*

39. *Ibid.*

40. ジョホル地域のパウン（*To' Pawang/Dato' Pawang*）は，この地域の住民を疫病から守り，ヌグリを守護する者（*pelihara negeri*）である。ジョホルのパワンはビドゥアンダ・クバンサのスクからしか出ない [インフォーマント，現パワンの Kudus 氏]。

41. ちなみに前首長 Wan Omar の父は Muar 出身であった [ABDUL SAMAD Idris 1968: 140]。

42. トキンまたはトケンの上端には，歴代の首長の黄色い布が重ねて被せてある。これはジョホル首長の宝器の中でも，最も神聖なものとみなされている。但し，筆者の直接観察によれば，布の枚数は歴代の首長の数には遥かに及ばなかった。

43. 一般に，首長の後方には彼の神聖なダウラットがあると言われるが，この神聖な空間に女ワリス長が坐っているのは興味深い。一般人なら，このダウラットに打たれて (*kena daulat*)，倒れてしまうはずだからである。
44. BAHARON AZHAR bin Raffie'i 1973: 364–5.
45. *Ibid.* なお，ダトッ・ナラ・スクダイの墓を筆者は Kampung Durian Besar で確認している。
46. WAN ABDUL KADIR & ABDUL RAHMAN 1976.
47. "*La ilaha illalah*" (「アッラーの他に神はない」) の聖句を唱えること。
48. WAN ABDUL KADIR & ABDUL RAHMAN 1976: 17–19.
49. クルアーンの一章。
50. WAN ABDUL KADIR & ABDUL RAHMAN 1976: 34.
51. 素材は不明。
52. *Ibid:* 25.
53. *Ibid*: 26–27.
54. *Ibid.*
55. 王の即位儀礼 (*pertabalan*) においては，ダウラットを「下ろす」(*menurunkan daulat*) という表現があり [ABDUL SAMAD Idris 1961: 91]，王権と首長権との対称性が示されていて興味深い。これは N. スンビランの王権と首長権の意義を解明する重要な手懸かりを提供するであろう。
56. WAN ABDUL KADIR & ABDUL RAHMAN 1976: 27. 王の即位式の際は "*Daulat Tuanku*" が三唱される。
57. *Ibid:* 27–28.
58. *Ibid:* 22–24.
59. *Ibid.*
60. *Ibid:* 24, 28–29.
61. *Ibid.*
62. *Ibid:* 29–30.
63. *Ibid:* 31–32.
64. *Ibid.*
65. *Ibid.*
66. *Ibid:* 32–33.
67. *Ibid:* 33–35.
68. インフォーマントは *Dato' Menteri Lebai* Mudah 氏。

69. インフォーマントは *Dato' Baginda Tan Mas* Haji Abdul Rahman 氏。
70. 同上。クラマット (*keramat*) として知られる聖墓が，生きているかのように高く成長するという伝承は，N. スンビランの各地に存在する [cf. 富沢 1984a]。
71. インフォーマントは *Dato' Pawang* Kudus 氏。
72. CANNADINE, D. 1983, 梶原 1984.

引用・参照文献

Abdul Kahar b. Bador 1963

*Kinship and Marriage among the Negri Sembilan Malays.* Thesis submitted for the Degree of Master of Arts in the Department of Anthropology, London School of Economics, University of London.

Abdul Samad Idris 1961

*Takhta Kerajaan Negri Sembilan.* Seremban: N. S. Malay Co-op. Printing Socy.

——— 1968

*Negeri Sembilan dan Sejarah-nya.* Kuala Lumpur: Utusan Melayu Berhad.

Baharon Azhar b. Raffie'i 1973

*Parit Gong: An Orang Asli Community in Transition.* Dissertation submitted for the Degree of Ph. D. at the University of Cambridge.

Cannadine, D. 1983

"The Context, Performance and Meaning of Ritual: The British Monarchy and the 'Invention of Tradition', c. 1820–1977" [in] Hobsbawm, E. & T. Ranger (eds.) *The Invention of Tradition.* Cambridge University Press: 101–164.

Geertz, C. 1980

*Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali.* Princeton University Press.

Hooker, M. B. 1972

*Adat Laws in Modern Malaya: Land Tenure, Traditional Government and Religion.* Oxford University Press.

de Josselin de Jong, P. E. 1960

*Minangkabau and Negri Sembilan: Socio-political Structure in Indonesia.* Djakarta: Bhratara.

梶原景昭 1984
「歴史と象徴」，青木保（編）『現代の人類学 4：象徴人類学』東京；至文堂：28–41.

Lewis, D. K. 1962
*The Minangkabau Malay of Negri Sembilan: A Study of Socio-Cultural Change.* Cornell University, Ph. D. Thesis.

Newbold 1834
"Sketch of the Four Menangcabowe States in the Interior of the Malayan Peninsula" [in] Moor, J. H. (ed.) *Notices of the Indian Archipelago and Adjacent Countries*, Singapore, 1837: 255–258.

Swift, M. G. 1965
*Malay Peasant Society in Jelebu.* London School of Economics Monographs on Social Anthropology No. 29, The Athlone Press.

富沢寿勇 1984a.
「クラマットと呪術師——マレーシア，母系制村調査ノート——」『社会人類学年報』10 巻；弘文堂：137–152.

——— 1984b.
「シーソー上の王と被治者——ヌグリ・スンビラン王権神話再考——」『民族学研究』49 巻 2 号：131–156.

——— 1985
「ヌグリ・スンビラン王女の婚姻儀礼——王権の構成原理と現代的位相をめぐって——」東京大学教養学部人文科学科紀要第 82 輯，文化人類学研究報告 4：51–74.

Wan Abdul Kadir Yusof & Abdul Rahman Kaeh 1976
*Adat Istiadat Kerjan Undang Johol KeXI*, Kertas Data No. 7, Jabatan Pengajian Melayu, Universiti Malaya, Kuala Lumpur.

Wilkinson, R. J. (ed.) (1907–1916) 1971
*Papers on Malay Subjects;* Selected and introduced by P. L. Burns. Oxford University Press.

Winstedt, R. O. 1934
"Negri Sembilan: The History, Polity and Beliefs of the Nine States." *Journal of the Malayan Branch, Royal Asiatic Society*, vol. XII, part III.